

とくいく「禅語」四

慈眼（じげん）

慈眼という禅語があります。慈しみの眼。人に教え導くには、ここはこうしなさい。こう直しなさい。こうした方が良くといった改善点を探す視点から指導しなくては、なかなか成長（上達）しないかもしれません。しかし、そういった改善点ばかりに意識（心）が向いていると、その人（子供）の人間的な良さが見えなくなります。

道場での稽古指導においても学校や職場でも大事なことは、その人（子供）の人間的な良さを踏まえた上で指導（教育）を行うことです。

例えば、この生徒（子供）は、不器用だけど性格が明るく一所懸命に稽古に取り組んでいる。この生徒は内気でおとなしく活発ではないけど、稽古に休まず来て頑張っている。この生徒は、試合に出て負けてばかりだけど、へこたれないで稽古をしているなど、技が上手いとか試合で勝つといったこと以外のその人の良さを知る（探す）視点から生徒を見なければ、人間形成と人間教育（人を育てる）という目的から大きく外れてしまいます。

武道やスポーツにおける競技での勝敗、学校でのテストの良し悪しなどは、ある意味勝負事（優劣を競うこと）ですから良い結果を得ることを目標にして努力することはとても大事なことです。そのことばかりに囚われ近視眼的（大局を見ず、目先のことばかりに囚われる）にその人を評価し見てしまうと、その人の良い所が見えなくなってしまいます。慈眼の「慈」は慈しみの心、安楽（心身の苦痛がない）、与楽（楽しみを与える）を意味します。つまり、慈眼の心で、その人の人間的な良さを知り、慈しみの眼で接することで、その人は安心して物事に取り組むことができるようになるということです。

武道やスポーツを通して、また学校や家庭、企業などでも人を育てるといことは、大変むずかしいことです。その際、どうやって育てるか。単純に「褒めて伸ばすのか」「叱って伸ばすのか」といった方法でも、その時々によって使い分けることが必要です。褒めると気が緩みなかなか伸びない人もいれば、気分良くして伸びる人もいます。叱られて落ち込みやる気をなくす人もいれば、奮起をしてやる気を出す人もいます。人の反応はその人の性格や状態（環境や体調）によって様々です。

また、人間の人格は自分の心の習慣性を、より肯定的な方向に向けるようにするのか、否定的な方向に向けるのかで、大きく変わって行きます。

観音経の一節に「慈眼視衆生・福聚海無量」（じげんじしゅじょう、ふくじゅかいむりょう）、「慈しみの眼で視る、すると大海のように無限の福が集まる」と言う意味です。人の良さに目を向け、慈しみの眼で人を見れば、自分の周りにも相手にも良いことがたくさん集まってくる。慈眼の眼差しには、そういう力が秘められているように思います。